

① 宮城已知子さんへ

はじめまして。私は東京都に住んでいる十六歳の女子高生です。今回、学校の授業の課題として、宮城さんの戦争体験の証言を読ませて頂きました。そこで私が感じたことを伝えたいと思い、手紙を書かせて頂きました。

宮城さんが県立首里高等女学校をご卒業なさり、ずいせん学徒看護隊の隊員になられたのは十八歳の時だと知り、とても驚きました。時代が違うからというのはわかりますが、今の私とほとんど年齢が変わらないにもかかわらず、国のために働きたいと考えていらしかったことがとても印象的でした。もし私だったら疎開して、少しでも戦場から離れた所へ行くだろうと思います。現在では戦争に参加するのは良くないと思われていますが、恐怖心より貢献したい気持ちの方が強いということがとても逞しいと感じました。同時に、なぜ戦争に行くことが喜びなのか疑問に思いました。また、ずいせん学徒看護隊で宮城さんが体験したことを読んで、戦中に実際に起こっていた悲惨な事実を知りました。

文章の最後の方に、「上の偉い人が勝手に、また（戦争を）やるかもしれないよ。その被害を受けるのは国民だよ。」と書かれていました。宮城さんの証言では、偉い人には薬があったけれど、そうでない人は見捨てられていたとわかりました。つまり、国の上部の人々は勝手に戦争を始めてしまうのにしっかり命は保障され、逆に国民は戦争に付き合わされて、命をかけて戦ってひどい怪我を負って帰ってきても、あっさり切り捨てられるということです。この状態を想像するだけで頭がおかしくなりそうです。国に貢献した宮城さんの大切な故郷、沖縄のことをアメリカに売り、訪れた平和を戦後七十五年と言っているけれど、はたして本当にそうなのか甚だ疑問を感じます。この機会にさらに沖縄戦について調べて、知識を増やしていきたいと思います。

2004 年生まれ、16 歳、東京純心女子高等学校 1 年

② 宮城已知子さんへ

私が宮城已知子さんの文章を読んで、印象に残っている言葉があります。それは、「戦争は人災だよ。戦争っていうのはね、上の人が勝手に、またやるかもしれないよ。」という言葉です。

私たちの今の生活からは到底考えられないことばかりがこの文章に綴られており、最初に読んだときは驚きと衝撃が隠せませんでした。今は、「戦争はしてはいけないこと。」という認識がありますが、戦時中には戦争に行くことが正しいとされていたと聞きました。その時代に宮城さんのお母様がそれを良く思っていなかったように、子どもを戦争に送り出したくないと思っていた親は多かったはずだと思います。それにもかかわらず、戦争に行くことが正しいと、従うしかないと思わせてしまうほどに、国の権力が強かったのかと恐ろしく感じました。宮城さんがずいせん学徒隊として派遣されたこと以外にも、国の指導者による差別や行動の恐ろしさに、私は衝撃を受けました。それは、薬がない中でも階級によって放っておかれるのか、手術台で手当てを受けられるのかが決まったということです。放っておかれた人に対して治療を何もできず、死体を捨てに行かなければいけないということが毎日のように起こっていたら、私だったらどうしていたのだろう、と考えると想像もつきません。ただ、宮城さんが話されていた「生き地獄」という言葉がとても重く、これから私たちが絶対に戦争を起こしてはいけないという気持ちを引き継いでいく中で、絶対に忘れてはいけないと思いました。

宮城さんは「過去の反省をしなければ、前進はないよ」とおっしゃっていましたが、今の日本政府は過去の出来事を反省しているのかどうか私にはわかりません。それでも、今、私たちにできることを着実にやり、次の世代の人たちに伝えていきたいと思いました。

2003 年生まれ、16 歳、東京純心女子高等学校 1 年

③ 宮城已知子さんへ

こんにちは。東京純心女子高等学校の生徒です。宮城さんの戦争体験を読ませていただきました。今まで第二次世界大戦中の沖縄についてきちんと知ろうとしたことがなかったので、実体験のあまりの生々しさに驚きました。私たちとそんなに年が変わらない女の子が戦争に駆り出され、さらに知識もない医療の現場で働かされるという状況は、壮絶すぎて想像できないほどです。知らない大人ばかりの中で、反発すれば殺されるという恐怖と隣り合わせで生きていたのだと感じました。宮城さんは負傷兵の世話や、死んでしまった兵の死体を捨てる手伝いをさせられていたそうですね。そのような悲惨な体験の中でも、私が特に衝撃を受けたのは、生き残った沖縄の防衛隊を殺す立場になりかけたという話です。偉い人は薬をもらえて、沖縄兵は見捨てられる、同じ沖縄の人々が差別され死んでいくのを目の当たりにしたのだと思うと、そのショックは計り知れません。そのような辛い思いをして終戦を迎えてからもなお、沖縄差別を受けているのは苦しいと思います。基地が近くにあって、いつも爆音がする。朝夜関係なく飛行機が離陸する。他にも、調べた中でアメリカ兵による少女暴行やひき逃げ事件などの被害を知りました。はやく沖縄の方々がそのような事件に悩まされることなく生活できるようになれば良いと心から思います。

私は実際に戦争を体験したことがないので、体験者の気持ちを本当の意味で理解することは不可能です。でも宮城さんの書かれた「上の人が勝手に・・・被害を受けるのは国民」、どうしたら阻止できるかを考えるために歴史を知り過去を反省しなくてはいけない、という言葉がとても響きました。私は宮城さんが体験したような辛い思いをしたくありません。また他の人にも、そのような思いをさせたくありません。そのために、自分が今できることを探したいと思います。過去を知る機会を与えてくださり、ありがとうございました。

2003 年生まれ、16 歳、東京純心女子高等学校 1 年

④

宮城已知子さんの証言を読み、宮城さんと兵隊さんとのやりとりがとても印象に残りました。注射を打たれずに生きて帰って来ることができた兵隊さんがでいご隊の慰霊祭で「女学生に助けられた」と言っていたのを聞いた宮城さんは、戦争が終わって何年も誰にも話さないで黙っていたことがこんなにも感謝されていたことを知ったと思います。私は注射を打たれずに生きられた兵隊さんと、打てずに注射を捨てた宮城さんの行動は奇跡だと思い感動しました。

また、証言の最後から四行目の「天災は止められないけど、人災は止めることができる」という言葉に感銘を受けました。これを読んで確かに人災は人が起こさなければ始まらないし、戦争は人災の一番の例ではないかと気づくことができました。戦争を行うのは上の偉い人ではないし、一番被害を受けるのは国民だという宮城さんの言葉はとても重く、深い意味がこもっているのだと感じました。

私が証言を読んでいる中で興味を持った一文があります。それは、「沖縄には戦後はないと思っている」という文です。これを見たとき私は、戦争は終わっているのになぜ・・・と考えました。しかしすぐにどういう意味かを理解しました。沖縄には基地があり、早朝や深夜にも戦闘機がうろうろしている状況は、戦争を経験した人々にとっては戦争中の状況と似ているからではないかということです。自分を極限にまで追い込んだアメリカが、自分が生活している区域にいるというのは嫌だと思ひ、私も考えられません。そのことを今宮城さんが過ごしている日々だと思ひ私には心が痛くなります。私が望むのは宮城さんが平和だと思ひ日が来ることです。私たちが平和だと思ひいても、実際に経験した方が平和だと感じなければ、一緒だと思ひからです。全ての人が平和だと思ひえる日が来ることを私は願ひたいと思ひます。

2003 年生まれ、16 歳、純心女子高等学校 1 年（長崎）

⑤

私は中学の修学旅行でひめゆりの塔に行った際に観た学徒看護隊だった方のインタビューがとても心に残っていたので、同じ学徒看護隊だった宮城已知子さんに手紙を書きたいと思いました。

一番に、私は軍医のような人から「担架に乗っている人に一人ずつ注射を打ってこい」と言われたその注射が、楽に死なす毒入りだったということに驚きました。まだ生きている人々をどうして殺さなければならなかったのか。食料不足のため。偉い人たちは防衛隊の方たちの命を大切に思っていなかったため。逆に楽に死ぬ方がこれから苦しむよりも良いと思ったのか私には分かりません。もし私が宮城已知子さんの立場だったら、何も深く考えずに早く恐怖から逃れようと兵隊さんに注射を打っていただろうなと思います。

日本政府がアメリカに賠償金の代わりに沖縄を売ったことによって、私たちがオスプレイを見に行った嘉手納基地が、宮城已知子さんが子どもの頃遊んだ小川や通った学校、肥え桶を運んだ畑や道だったということを知って感慨深くなりました。

宮城已知子さんのお友達を一人でも多く知ってもらいたいという気持ちはきっとたくさんの人に届いていると思います。私たちがもう二度と同じような過ちを犯さないように、過去を反省しないといけないと考えます。また戦争の恐ろしさを世界中の若者に伝え、一人ひとりが戦争は絶対にしてはいけないということを思い、どうすれば人災である戦争を阻止できるかを考えることが大切だと思います。そのために歴史を学び、どのような傾向であると戦争が始まるかを知り、政治家たちの発言や行動をきちんと見張っていようと思います。

2003 年生まれ、16 歳、純心女子高等学校 1 年（長崎）

⑥

私はあなたの手記を読んで、改めて教育の大切さを知りました。「なんでうちの親は、戦争に行くのを喜んでいないのか、頑張って行きなさいと言わないのかねとがっかりしたさ」という言葉は、戦争を肯定する教育を受けた人ならではの考えなのではないかと思いました。また、もし自分が当時生きていたら同じ考えを持つのだろうか。幼少期に戦争肯定教育を受けると、誰でもそういった考えを持つようになるのだろうかと怖くなりました。

そして、「沖縄にはまだ戦後はないと思っている」という部分は、私にとってとても衝撃的な言葉でした。私が暮らす長崎は原子爆弾が投下されましたが、現在では街もきれいに整備され、完全に戦争は終わっているものだと思っていました。でも、沖縄のように軍の基地などが身近にあることで、今田に戦争を近くに感じている人がいると言うことに驚きました。見た目が華やかであるとか、観光が発展しているというのは本当の平和ではないのだと思いました。

私は、将来教師になろうと思っています。未来のこどもたちを教導くために、今私にできること、例えば、戦争に動員された方々のお話をお聞きしたり、戦争における日本の加害者や被害者としての歴史や客観的で正確な情報を得るなど色々なことを学ぼうと思いました。また、情報を得るだけで無く、戦争のことを知らない人や、幼い子どもに正しい教育として平和の大切さや、今もなお苦しんでいる人がいることなどを教えられるようになりたいと思いました。

私たちが戦争をしないようにするだけで無く、私たちの次の世代に戦争を起こさせないようにしなければならぬと思いました。

2003 年生まれ、16 歳、純心女子高等学校 1 年（長崎）

⑦

私は今回宮城已知子さんの証言を聞いて、今の私にできることは何だろうかと深く考えさせられました。

宮城已知子さんの証言の中で強く印象に残ったのは、「昼間は艦砲攻撃が激しいから、夕方攻撃が止んでいる間にナゲーラ壕の前にテントを張ってその中で卒業式をやったんだよ。」というところです。私は、卒業式などたくさんの人たちから祝福してもらえるとき、今まで一度も命の危機にさらされたことはありません。多くの人たちに祝福されて喜びで満たされていました。しかし、この私が経験した卒業式、当たり前のように祝ってもらえた卒業式は、とても特別なことと思いました。

今の時代に生きている私は当たり前を感じてしまっていることばかりだと思います。今の私の考え方、人との接し方は、一九四五年、戦争時代を生きていた若者から見るとどう感じるのでしょうか。私にはどう思われるか分かりませんから会ってお聞きしたいと強く感じるのです。

最近、戦争のことが過去のことになってしまっていると思うことがたくさんあります。戦争体験者の高齢化が進み、亡くなられる方も年々増えています。確かに、百年後には戦争体験をした人、その人から直接話を聞いた人はいなくなります。しかし、今を生きている私が過去のことにはすることは間違っています。

宮城さんの証言は次のように締めくくられています。

「天災は止められないけど、人災は止めることができるってことを覚えていて。戦争っていうのはね、上の人が勝手にして、またやるかも知れないよ。その被害を受けるのは国民だよ。どうしたら阻止できるかを、みんなで考えて。それには、歴史を勉強しなさいというわけ。過去の反省をしなければ、前進はないよ。

この言葉にすべてが詰まっていると思います。

2004 年生まれ、16 歳、純心女子高等学校 1 年（長崎）

⑧

長崎に住んでいる私にとって戦争に関する知識は、他県に住んでいる学生よりあると思います。平和学習などで、被爆体験をした方から体験談を聞いたり、ビデオを見たりしてたくさんの方の知識を得ました。だけど、今回已知子さんのお話を聞いて、私はびっくりすることばかりでした。そして、沖縄での地上戦は本当に残酷だったんだと改めて思いました。

この戦争があった当時已知子さんは小学生でした。なので、私も小学生の自分と重ね合わせてこの話を読みました。その中で一番心に残った所は、已知子さんが「女だってお国のために働く、絶対疎開しない。」と言った場面です。小学生の自分なら、いや、今の自分でもそんなことは言えません。それだけその当時の日本では、国のために自分の命を捧げることが当たり前だと考えられていたのだと恐ろしくなりました。戦争が始まったから、ずいせん隊員になって、色々な人の死を間近で見るのが何百回もあったと思います。戦争を始めると言ったのは、偉い人なのに……。偉い人は守られて死なずにすみ、なぜ平和で普通の生活をただ送りたかっただけの国民が犠牲にならなくてはいけないのか？戦争で怪我をしたとき、偉い人は治療されるのに一般人は「ほっとけ」と言われる。同じ人間なのに。日本は戦争に負け、賠償金を払う代わりに好きにして良いからと沖縄を売ったのです。本土は戦後何十年したら平和になったかも知れませんが、今も沖縄は戦争の苦しみから抜けていない人もいることをとても実感しました。この決断も、日本の偉い人が決めてその人たちは良かったかも知れませんが、今も犠牲になっている国民はたくさんいます。

これから先、私たちが苦しまないためにも、もっとみんなで戦争について考え、二度とこんなことを起こしてはいけないと心から思いました。今私にできることは何かを考えていきたいです。

2004 年生まれ、16 歳、純心女子高等学校 1 年（長崎）